

ふるさと（地域）に学び、ふるさとを愛する個が育つ社会科学習

～つなぐ・つむぐ・高め合う防災教育の研究を通して～

梶本 久子

中学年の社会科は地域学習である。地域社会の社会的事象の特色や相互の関連について考える力を育てることがねらいとなる。その中で、ふるさとを愛する個を育てたいと考え、地域にこだわり、地域と連携した教育を中心に社会科学習をすすめてきた。ふるさとに学ぶとは、地域に関わることから、教材への出会いを、その中から見出していくことであると考えている。つまり子どもたちが、自治体、大学、企業やNPO等の様々な人と交流を通じて、豊かで多様な学習をできるようにし、社会的事象を考えるきっかけを作るということである。ふるさとから防災を学ぶということは、自然災害から守る、つまり、何が必要とされているのかという気づきを与え、実践していくというきっかけを学習できるのではないかという思いから、本実践を昨年度に引き続き実施した。その結果、異学年にわたっての防災学習の交流が生まれ、また、地域の課題はもちろん、地域のよさを学んだ。また、地域の連携を効果的な場面で取り入れたカリキュラムを構成することで、多様な集団・組織の中でコミュニケーションや豊かな人間関係を築き、成長を果たしていく子、ふるさとに学ぶ子（個）を育むことができた。

キーワード：学びをデザインする子どもたち、地域教育力、防災教育、地域DNA、ふるさと

1. 地域教材活用の有効性

ふるさと和歌山にこだわり地域に学ぶ理由は、子どもたちが心のふるさととして、自分たちの生活する地域やまちなどを大切にすることを育てたいと考えたからだ。また、子ども自身が地域社会の中でさまざまな実情に目を向け、そこに暮らす人々との直接的なかわりをもつ中で、学び、自らの思いや願いを表現し、問い続ける主体的な活動が、地域社会に強い愛情や誇りをもつことにつながると考えている。

地域教材活用の有効性を、以下の4点でとらえた。

- ① 子どもたちにとって身近であり、親近感を持ち、その中で生活することのよさを感じることができる。
- ② 見学や調査を通して直接経験による実感を伴った認識が可能であり、様々な人と出会い、資料や情報を収集するなど、多様性をもって地域の教育資源を活用することができる。
- ③ 実生活にとって切実感があり、体験や知識を生かした思考・判断の場面を設定することができる。
- ④ 地域社会への愛着を育成でき、地域社会の一員としての自覚を高め、地域社会の発展を願う気持ちを培うことができる。

これら4点が、地域に学ぶことの有効性であり、これらの条件を満たす「ふるさと和歌山まちづくりプロジェクト」を1年間の学習の柱として計画した。

「ふるさとまちづくりプロジェクト」として、大きく3つの教材をあげたい。1学期は、校区探検を通して子どもたちがこだわった「コンビニエンスストアF店」を入口とした学習である。和歌山県庁や多くの企

業が集まる校区にある「コンビニエンスストアF店」の特徴と自分たちの地域の「コンビニエンスストア」や「スーパーマーケット」を比較することでコンビニエンスストアの学習から和歌山市のそれぞれの地域の学習へと広がった。そして、コンビニエンスストアの協力で、F店での子ども店長体験、和歌山市加太地区（海に近い地域）での『3C海の家』の販売体験などそれぞれの地域の特色をいかした販売、『売る』ということを学んだ。2学期は「消防署・消防団」を入口に、それぞれの地域の消防、防災と比較することで、さらに「自分の地域につながる子、自分の地域にもどれる子」をめざした。3学期は「工場のしごと」「農家のしごと」で『作る』ことを中心にした学習をもとに、特色ある地域のまちづくりを学んだ。

そして、3つの単元を通して学んだことをもとに、そのよさや課題を自分の住む地域の防災やまちづくりへと戻し、自分の考えを地域へ発信していくことを1年間の学びとして計画した。このプロジェクトを通し、地域の多くの教材と出合わせることで、子どもたちは一面的・主観的な見方、考え方から、多面的・客観的に深化していった。その中でも特に有効性を感じた②の“地域教育力活用”について、防災教育を中心に詳しく述べたい。

2. 「つなぐ・つむぐ・高め合う」防災教育

本校の特性として、和歌山市を中心にあらゆる地域から通っているということが挙げられる。それぞれの地域によって、災害に対する意識や対策もちがう。子どもたちの中にも、自分の地域の様子を話すときに、海岸沿いで津波の心配を話す子、台風による大雨で家の近くが浸水になったことで水害を気にする子、中央

構造線上にあり直下型地震を気にする子、山崩れや道の狭さを心配する子など、防災について関心をもつ子が多くいた。そこで、それぞれ28人28通りの「地域の防災」を考えることにより、「自分の地域につながる子、自分の地域にもどれる子」に育つのではないかと思い、「地域の防災」を焦点化して取り組むことにした。

東日本大震災後、防災のあり方について多くのことが変化した。本校も、今年度、地域住民の願いをうけ「和歌山大学附属小中学校が避難場所へ」というニュースも報道された。子どもたちの住む地域についても、想定されていた津波の高さや浸水地域なども変更された。防災のあり方が刻々と変化していく中で、臨機応変に対応できる子どもたちに育てることこそ、本当の防災教育であると考えた。そこで、社会の仕組みを理解したうえで、3年生の等身大の自分自身が安全安心な社会の構築のためにどう参画していくかを学んでいくことを大切にしたい。そうすることにより、地域や防災について切実感をもって調べることができた。

また、消防署、消防団、防災センター、和歌山市などの防災教育に携わる人、前年度担任し防災を学んだ5年生の子どもたち、保護者のボランティアなどから教わる今まで知らなかった事実と次々と出合わせることで驚きやハテナを呼び起こし、学習課題を追究していくエネルギーとした。こういった出会いの一つひとつが、人々の願いや工夫を知るきっかけになり、その思いに応えようと子どもたちも、追究姿勢に深まりが出て、学び合うことができた。出合った一つひとつの教育力を「つなぎ、つむぎ、高め合う」ことが、防災教育(学び)をデザインする子どもとなると考えた。

2. 1. 「つなぐ」 地域教育力

火災を見たという体験がない子どもがほとんどであり、火災の怖さや悲惨さを知らない子どもたちにとって火災がない安全な暮らしは、当たり前のものであり、火事に対する実感が無いのが実態である。また、火事が起きたら、消防署の人を呼べば消してくれるという認識を持っており、地域を守る連携やそこに従事する人々の日頃の苦労や思いに気づいている子はほとんどいない。そこで、消防署や消防団、関係諸機関、学校や地域の消防設備について具体的に調べることで、それらの諸機関が平素から火災に備えていること、緊急事態には関係機関と協力して一刻を争って事態に対処して地域の人々の安全な暮らしを守っていることを理解できるようにした。また、この学習を通して、実は消防署の人以外にも、普段は別の仕事に従事している人たちが消防団を組織して、消防署と連携しながら初期消火や防火活動などを行っていることを知り、消防団の人たちは、自分たちの地域の安全は自分たちで守っていくという強い願いをもって活動していることをとらえることができた。

消防にかかわる方だけでなく、4月から子どもたちは多くの地域の方に出会った。学習を進めていく上で、出会わせ方を工夫し、どの方にも固有名詞で呼べるように、出会いを大切にしてきた。防災の学習は知識だけで終わることが多く、子どもたちにとっても、学習をすすめていく上で難しいと言われている。3年生として、和歌山市の防災の取り組みや市役所の仕組みについても学ばなければいけない点も多くあると思うが、3年生らしい素直で柔らかい感性で、まずは出会った人に興味をもち、好きになることから防災のことを学んでいくことが大切なのではないかと感じた。

実際、計画していたときは、消防署、消防団を深く学ばせていくつもりで動いていたが、子どもたちの思考にそうと、学習計画が消防だけでなく防災に変わっていった。それを一つ一つ確かなものにしていくため、和歌山市の総合防災課や消防署、地域の方々の所へ何度も訪ね、交流し、多くのことを教えていただいた。何度か交流をする中で、学んだことや調べ学習、話し合いの結果を直接伝えたいという思いを持ち、劇化やポスター作り、提案書作りへとつながっていった。そのことにより「自分の地域」に親近感、共感を持ち、多くの和歌山の人伝えたい使命感やこれからの生活に生かしていこうとする意識が育ち、学びを深めることができた。そういった活動の中で、繰り返しコミュニケーションをとることにより、お互いが親近感を増しただけでなく、早い時期から、和歌山の安全を守る方々の思いや願いに気づくことができた。

そして、自分たちの安全・安心な暮らしを誰かに守ってもらうのではなく、地域の一員として積極的に自分たちで守っていくこと、地域の人たちをつないでいくことの大切さに気づく子どもも出てきた。

2. 2. 「つむぐ」 異学年交流

本校の研究テーマである「学びをデザインする子どもたち」とは、ひとり学習と全体学習が相互に関連しながら、さらに深めていくことだと考える。しかし、ひとり学習というと「調べる」だけで満足する子どもも多く、「調べたことをもとに考える」ことができる子どもは少ない。年間を通して、地域素材の活用や生の声を聞き取る活動を大切に、子どもたちが自分とのかかわりから事象がとらえられるようにすることで、自分の考えをより深めることができる。「防災教育」は、見えにくく切実感が出にくい教材である。南海地震は30年以内の発生確率60%、30年以内とは、明日起きるかもしれないが、30年後に起きるかもしれないということでもある。だから、明日の備えが30年後、100年後にも生かされなければならない。しかし、継続的に備えることは大変難しい。つまり、課題として、切実感をもった継続可能な取り組みがあげられる。

4月から子どもたちは、インタビュー、アンケート、ゲストティーチャーからの話などいろいろな方法で学

習を進め、意欲的に学習していた。1学期の「売る」学習で、昨年度担任した子どもたちに「子ども店長」について語ってもらう時間をとった。子どもたちにとっては、よく知っている5年生のお兄ちゃんお姉ちゃんが、子ども店長の楽しさだけでなく、社会科の調べ学習の楽しさまで話してくれたため、多面的に考え、学びを深めることができた。5年生のアドバイスが3年生の子どもたちの心を揺さぶったのである。

1学期の経験から、2学期も同じように防災について話してもらう時間をとった。5年生の子どもたちにとって、「子ども店長」以上に考えを深め、自信をもって取り組んできた防災の学習であっただけに、登下校中や休憩時間を使って詳しく説明してくれる子も多かった。昨年度作成した「防災マップ」や「4A防災三宣言」「和歌山市の防災ジオラマ」などを見せて、実際にその時の思いを詳しく話してもらうことにより、少しずつ自分事としてとらえ始める姿が見えてきた。

そして、その学びを防災の意識が低い家の人に伝えたいという思いが変わっていった。つまり、家の人の考えを変えたい、多くの人に防災を伝えたいという「切実感」が出てきたのである。切実感をもって、様々な活動を進める中で自分たちの住んでいる地域への思いをより強く持ち、自分の思いや考えを確実なものにすることができた。そして、学んだことを今度は劇化やポスター、よびかけなどで低学年へ伝えることで、より一層、自分の考えを吟味することができ、3年生なりの学び方を身につけたように思う。

異学年交流を進めていく中で、1年間という短い期間の教育ではない学びの連続性、持続性を感じた。学びを異学年交流で「つむぐ」ことにより大きな成果になると感じた。

そして、今後も意欲的に追究し、自分で問題を発見し、問題解決の過程でいきいきと学び合うことで、自分を見つめなおし、未来への生き方へとつなげていける子にさせたいと考えている。

2. 3. 「高め合う」

出合った一つひとつの地域の教育力、異学年交流による学びを「つなぎ、つむいでいく」、つまり、点と点が線でつながり、つむいでいくことが、学びを高め合うことになると考えた。高め合うためには、防災の学習を地域へと発信していくこと、その知識を地域と共有することが大切である。つまり、防災教育を地域DNAとしていくことをめざしていきたい。

2. 3. 1. 「高め合う」 地域への発信

子どもの考えは表現することによって表出され、目に見える形となる。そうした表現方法や発信の場の充実や工夫が大切であると考えている。そして、子どもが自分だけでは思いつかかなかつた見方や考え方を発見できることが社会科の「考える面白さ」なのである。

「自分の地域」という身近で子どもらしい視点から防災を取り上げることにより、3年生の今だからできることも考えさせた。そのうえで、従来の防災教育、総合的な学習の視点「防災における自分自身」で終わることなく、社会科のねらいにそって「市民を守る社会の仕組み」についても気づいた。社会の仕組みを理解したうえで、3年生の等身大の自分自身が安全安心な社会の構築のためにどう参画していくかを学んでいくことを大切にしたい。

「自分の地域につながる子、自分の地域にもどれる子」をめざし、それぞれの一人一人が、責任をもって学んだことを、地域に合わせた内容で地域の回覧板や掲示板などを通して発信するようにした。本校に通う子どもにとって地域の回覧板や掲示板というのは、自分事としてとらえにくいものである。一人一人が地域とつながり、自分たちの調べ学習や話し合いの結果が直接伝わるといふ思いをもつことで、より、地域に親近感、共感をもつのではないかと考えたのである。そして、3年生なりの「防災まちづくり」として、一人一人が担当を持って地域の人や和歌山の人にみてもらうポスターやチラシ作り、自分の地域のオリジナル防災10カ条を地域の人に伝えるという思いで取り組むことで、ひとり調べの必要性、目的意識や切実感を持ち、また、自分の生活を振り返り、これからの生活に生かしているとする意識が育つのではないかと考えた。

また、地元企業や大学生とのコラボレーションのカフェ事業（カフェを大学生と一緒に企画運営し、郊外の不特定多数の住民に学習を発信する場）、さらに子どもたち自身が地域素材をもとに企画運営するカフェなどを中心に「ふるさと和歌山まちづくりプロジェクト」の取り組みを発信した。和歌山市や校区のジオラマを用いたプレゼンテーション、和歌山市の防災の施策の紹介、防災クイズ、劇化、防災グッズ作りなどワークショップ活動など様々な表現活動を行った。その際には、異学年交流で学習しあった5年生も一緒に劇化したり、防災グッズ作りをしたりして共に学習を発信することができた。そして、お互いの子どもたちにとって、より多くの人に伝える大きな原動力となった。

そういったワークショップや繰り返し、多くの場や人の前でのプレゼンテーション活動を行うことによって、表現力の向上等、子どもたちの大きな変容が見られた。

2. 3. 1. 「高め合う」 地域との知識の共有

社会科・総合的な学習を通して地域の未来に対する強い思いを校内外の多くの人に発信した。地域住民、保護者対象のアンケートの結果、保護者からは、地域の多くの方々が、子どもたちの学習を高めてくれる貴重な指導者になってくれたことへの感謝や和歌山の防災のよさや課題を発見したという意見をもらった。また、地域住民からは子どもたちの強い思いが、自分

たちも意識を高めなければという啓発につながった意見も多く寄せられた。

1年を通して多くの地域の方への聞き取り調査から、和歌山の防災の願いを実現していく地域の人々の工夫や努力について考える力が育った。また、発信という形で関わってくださった多くの方々を招待したり、提案書で説明する機会をもったりしたことで、出合った一つ一つの地域の教育力をつなぎ地域DNAとしていくことの第一歩となったと感じた。

3. 授業実践

(防災レンジャー参上～くらしを守る消防のしごと～)

本単元は、学習指導要領第3・4学年の内容(4)「地域社会における災害及び事故の防止について、次のことを見学、調査したり資料を活用したりして調べ、人々の安全を守るための関係機関の働きとそこに従事している人々や地域の人々の工夫や努力を考えるようにする。」(ア関係機関は地域の人々と協力して、災害や事故の防止に努めていること。イ関係の諸機関が相互に連携して、緊急に対処する体制をとっていること。)に基づき、地域における「消防署」を取り上げた。

3. 1. 単元目標

- ・火災や自然災害から地域の人々の安全を守る人や仕事について関心をもち、調べる活動を通して、人々の安全を守るための関係機関の働きとそこに従事している人々の工夫や努力を考えるようにする。
- ・自分たちが住んでいる地域でさらに安心してくらすために、多くの人からの聞き取りや調べ学習を通して、様々な考えやアイデアを出すことができる。

3. 2. 学びをデザインするために

身につけさせたい4つの力

上記の目標をもとに、本単元では、学びをデザインするものになるものとして「地域」をキーワードとして考えた。常に自分の「地域」と比べる子どもたちを育てることにより、学びをデザインする姿が見られると考えている。そして、本単元を通して、めざす子ども像、つけたい力4点を設定し「学びをデザインする子ども」に近づけるように考えた。

- ① 自分の課題を進んで調べようとする力
自分が地域の代表であるという目的意識をもつことで学習意欲が高まり、進んで調べ学習をしたり、安全を願う人の思いをインタビューしたりする学習に取り組むことができる子ども
- ② 調べ活動の仕方を学ぶ力
家の人に防災について聞く活動、地域の人、安全に携わる人にインタビューする活動など、課題を追究するための体験活動を取り入れることで、課題解決のためにどんなことを調べたらよいか考える子ども
- ③ 目的に応じた方法で分かったことを表現する力

ICT機器を活用したり、相手を意識した話し方をしたりすることで、調べたことを分かりやすくまとめたり、発表したりする子ども

④ 地域のいろいろな人とかかわる力

まとめたことを話し合ったり、他の学年や家族、地域の人に発信したりすることにより、新たな課題を見つけることができる子ども 次に述べる「3. 3」では、特に①④について詳しく述べたい。

3. 3. 1. 学習文化に重点を

・表現力をつけるために

話し合いの原点である朝の会や道徳の時間を「聞き合い学び合える場」として大切にしている。話をしっかり聞く態度と発表の仕方を指導し、学び合う力を身につけていく。また各教科でも「心に響いた意見」を中心に作文や振り返りカードを書き、お互いの意見を多く認める文章の紹介をしている。(発表カード、スピーチ、心のアンテナ、近ごろ変わったことなど)、また、教室環境を工夫し、学習の足跡(掲示物)を使ったり、一人一人の立場表明(資料やアイデアの情報交換簡単に)をしやすくしたりするよう支援することで、自分の思いを堂々と話せる学習文化をつくっていった。

・子どもの疑問が問いに変わるとき

一人一人の調べ学習の驚きや疑問をテーマごとに教室に常掲し、子どもたちがその中からさらに調べたり、意見交換しあったりする場を多く設定するようにしている。自分の疑問や感想を一人一人発表し、全員の考えを知ることにより、自分の考えに責任をもつとともに意思表示できる喜びを感じることができると考えた。

子どものこだわっている課題は、個々に違いがある。

子どもの疑問を出し合うことで、矛盾する考えや不思議だなと思われることに気づく子がいる。その矛盾や気づきを取り上げ、話し合いを通してクラスの学習課題を考えた。個々の子どもたちの見方、考え方を生かした話し合い活動を位置づけることにより、子どもの疑問が淘汰され、問題意識がさらに醸成していくのではないかと考えている。

3. 3. 2. 「地域教育力」の活用

本単元では、3. 2の④の地域のいろいろな人とかかわる力(地域教育力を活用する力)を大切にすることで学びを深めることができた場面が多くみられた。

その中でもA児の作文を中心に3例挙げたい。

・元レスキュー隊のKさんとともに

Kさんから、消防署、レスキュー隊のことだけでなく、東日本大震災の救出活動の様子や和歌山市の防災やレスキューの現状を話してもらえたのでとても参考になった。「チームは家族みたいなもの。信頼していなければ命は預けられない」「速くするためには、丁寧に一回で終わらせること」など、普段の生活に関連することを楽しく話していただいた。附属小の保護者

でもあるKさんの人柄や興味深い話は子どもたちにとって、印象深いものとなり、その後も、いろいろな場面で「Kさんが言ってくれたようにしなくちゃ」と話す姿が多く見られた。その中で「和歌山市のレスキュー隊は31名、大きな地震がおこったときはすぐにみんなを助けることはできない。だからこそ、自分の命は自分で守ること、今、自分にできることはしておくこと」という言葉は強い心に残ったようだった。そして、その後の学習の多くの場面で、子どもたちから何度となく出てくる防災のキーワードとなった。



図1 Kさんに学ぶ

がんばろう！自分でできること

今日は、すごく感動しました。Kさんみたいに命を助ける仕事ってかっこいいと思いました。ぼくもしてみたいと思った。今日、Kさんにお話を聞いてびっくりしたのは、「自分でできること」です。ぼくの家は水害が心配なんですけど、どうにもできないと思っていましたが、話を聞いて今日、ぼくが考えたのは、例えば、田んぼや用水路に近づかないとか、外に出ないとか考えられるし、非常持ち出し袋は2階においておくとかもそうかもしれないです。でも、例えば山崩れの心配だったら、山の近くじゃない方に非常用持ち出し袋をおくとかもできる。自分で考えるって難しいけど気が付くと気持ちいいんだなと思いました。そして、Kさんの話をまた聞きたいと思いました。なぜかというレスキューの人は和歌山市のためにすごく頑張っていて、和歌山市のことが好きだから、みんなを助けたいのだなと思いました。

・和歌山市の防災について

防災に興味を持ち始めた子どもたちと和歌山市防災学習センターと同じ建物内にある総合防災課にいった。

防災学習センターでは「南海トラフの地震の想定が9月に変わり、和歌山市への津波の到達時間や津波の高さも変わったこと」、「予想しているよりも大きな地震や津波がくること」などを学び、その変化に驚いていた。また、総合防災課では和歌山市の防災の対策や防災グッズの紹介など学ぶことができた。子どもたちからは附属小が避難場所になることについての、質問

が多く出た。和歌山市総合防災課のOさんから「避難場所になるために話し合いの途中であること、一時避難場所になるので和歌山市からの備蓄品はおいでないこと、地域の声が大きく避難場所になったが、大津波警報のときだけに限定されていること」などを教えてもらった。具体的に答えてもらったことで、子どもたちにとっても現実の問題として考えるきっかけになった。和歌山市の総合防災課の仕事の様子や実際の取り組みを見せていただくことにより、市の防災対策の工夫や苦勞を知り、それをもとに地域をよりよくする考えを深めることができるようになった。地域のハザードマップを見直す子、防災家族会議をする子、一緒に和歌山市の防災無線に耳を傾ける子、地域の人へのインタビューをする子、防災グッズ作りをする子などが出てきた。そして、周りの人に和歌山市の防災の対策や工夫を伝えることで、実際に、人々の願いや取り組みを意識し始める子も出てきた。和歌山市の総合防災課の方のかかわりなどを通して、地方公共団体の仕組みや役割、和歌山市の防災にかかわる人の思いについても気付くことができた。

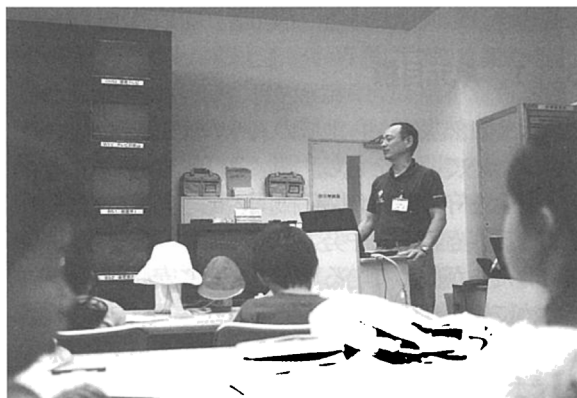


図2 Oさんに学ぶ

先生！実は言いたいことがあるよ

この前、Oさんに教えてもらっているいろんなことがわかりました。防災行政無線の意味は知らなかったし、市の人が防災のことを考えて工夫してくることも知らなかった。家に帰ってお母さんに話しても話しても終わらなくて、お風呂に入ってもご飯を食べても、寝る時も話していました。でも、わからないこともいっぱいありました。例えば自分の地域のことは調べてわかったけど、附属小のことはわからないこともありました。それにみんなの地域のことは聞いたけど、みんなが住んでいない地域のことはわかりません。だから、昨日お母さんに迎えに来てもらって、Oさんに会いに行きました。優しく教えてくれました。本当にうれしかったです。いろんな地域のマップももらったのでうれしかったです。そして、「和歌山市の防災にはもっとみんなの防災意識を高めなければいけない」と言ってくれたことが頭に残っています。そのためにどうしたらいいかみんな考えていきたいです。

・地域住民にインタビュー

3年生の調べ学習は、聞き取り調査、見学で見たこと、感じたことを中心になるべく具体的な「もの・こと」を大切にしていきたいと考えている。自ら学び、調べ、考える力などを育成するためには、1年間の中で、社会的事象を作業的・体験的な学習や問題解決学習等を通して、学び方を身に付けるような学習の工夫を考えていきたい。「学び方を学ぶ」ために、1年を通し、発表・インタビュー・調べ方ガイドブック等、3年生の発達段階にそった学び方カードを中心に細かく指導してきた。「学び方を学ぶ」ということは、教科書や地図帳・資料集・パソコン・インタビュー活動等を活用し、情報収集する技能、表現する技能・話し合う技能などを高めることはもちろん、多面的・多角的に思考・判断するといった問題を解決していく筋道や思考の方法を学ばせていく「プロセス」を学ぶことでもあると考えている。こういった「学び方」が、生きる力となり、生涯にわたって学び続けるための基礎を培うことになると考える。

そこで、今までのインタビューの経験をいかして、校区のいろいろな方にグループに分かれて地域の防災について聞き取りに行った。地域の方々は、子どもたちのよい聞き役にしてくれたり、阪神大震災の貴重な意見を話してくれたりした。地域の方々の不安な思いに心を痛め、防災対策の話に身を乗り出し一生懸命メモをとる姿が見られた。しかし、一方で防災の準備をしていない人、避難場所を知らない人などが多くいて、その防災に対する思いの温度差に驚く子どももたくさんいた。教室に戻った後「何とかして、地震に備えるように多くの人に伝えなくちゃいけないし、避難するのにどうしたらいいかわかってもらわなくっちゃ」と口々に話し始めた。子どもたちにとって自分の住んでいる地域でないということから、切実感がなくても使命感が大いに高まったと感じた瞬間だった。



図3 地域の人にインタビュー

早く何とかしよう

和歌山市の人やぼくがいろんなインタビューした人と、今日は聞いた人は全然違っていました。ぼくたちの方が防災のことを知っていて「教えて」って言われて、「たくさん勉強してるね」ってほめてもらいまし

た。でも、みんなが言っていたみたいに、一人でも多くの命を救うためには、5年生のY君が言っていたけどぼくたち一人一人が「浜口梧陵さん」をめざすことがいいのかなと思った。お母さんや大人の人に伝えることも必要だし、今、附属の子にももっと伝えなくちゃいけないと思いました。

4. 単元の考察

4. 1. 対話型学習の中で



図4 自分たちで作った附属小のジオラマで説明

子どもたちの課題作りの中で出てきた「附属小学校がひなん所になるって聞いたよ。みんなは安心?心配?」というB君の課題について話し合った。単元、また本時で、B君が変容できる場を提供したいという思いを強く持っていた。これは、課題作りをする際、大切にしたい点でもあった。意見交換の時、「安心」「心配」の2つに分かれた話し合いを位置づけた。その中で、各自が自分の考えや願いの根拠を持ち、今までの学習を振り返りながら授業に臨むことで、自信をもって発言できるようにした。課題については、子どもたちの発達段階を考えると防災という目に見えないことに対するの難しさや厳しい現状があった。また、地域に帰ると附属小とは別に避難所になることなど、課題として適切なのか大変悩んだ。しかし、自分たちの地域の問題点や現状としっかり向き合ったあとでの課題であったため、子どもたちから「避難場所になったときにどうしたらいいのかわかるのか」「ぼくらの附属小を何とかしなくちゃ!」「お母さんを説得するんだ」という声が多く聞かれた。また、昨年度までは、避難場所でなかった附属小が「どうして避難場所になったのか?」ということを考えていく中で自然に出てきたものだけに多くの子どもが関心をもつ課題でもあり、学ぶ道筋を探るために大事な課題でもあった。そこで、子どもたちの思いを大切に、いろいろな立場の人に話を聞く機会を多く設定した。保護者にも協力をよびかけ、地域でも、多くの人にインタビューやアンケートをし、意欲的にひとり学習を進める姿もみられた。その中で、3年生らしい「足で稼ぐ」調べ学習から多様な立場の人の思いや願いに気づくことができるのではないかと、また、学び方を学んでいくうちに、学習につながって

いくのではないかと考えた。そのためにも、教材と向き合い、じっくり自分の考えが持てるようひとり調べをする時間を保障した。本時ではそういったこれまでの調べ学習が話し合いの中で生かされるような場になった。課題に深く向き合い「自分たちにはできることは何だろう」「自分たちはどうしたらいいかな」という思いを持つ子からの気づきや思いがクラス全体に伝わることで、新たな視点が子どもに生まれ、全体の場、グループの場で深め合うことができた。

4. 2. 授業記録より

課題「附属小学校がひなん所になるって聞いたよ。みんなは安心？心配？」 一部抜粋



図5 ICT機器で説明

かりん：聞いてて思ったんだけどね、みんな心配って言っている子多いけど、そんな心配って言っても、総合防災課のOさんは「避難場所になるようする」って言ってたから、今の心配なところを安心に変えることをまず考えなくちゃいけないと思いませんか？

(C：うん、賛成) (C：でも・・・) ロ々に話す

かりん：だから、心配を安心にかえるように考えるといいと思うんですよ。どうですか？

かんと：え？心配を安心にかえるん？ぼくは一人で附属にいることになったら、不安だから、こういう風にタオルとかにかいとけばいいと思うんよ。ファイトとか、にっこりマークとかを。そして、書いたら、一人でいても少し安心になるからそんなことしたらいい。

たかし：ぼくの家は磯ノ浦なんやけど、(写真みせて)地域で避難訓練のイベントみたいなものしてるけど、さっき、しんや君がいていたみたいに附属の近くは避難訓練してなくて心配なんやから、附属の周りも避難訓練のイベントをやったら、心配が安心に変わると思うけど

ゆみか：たかし君の避難訓練の心配に続けて、串本幼稚園のように毎日避難訓練して、みんなでダンゴムシのポーズも朝の会に練習したら地震が来てもすぐ頭を守れて安心でいいと思う。

たつや：この片男波も地域で避難訓練しているんやけど、

地域の運動会でも、担架でリレーしたりして防災のためにがんばっているし、この地図見てほしいんやけど、要介護者と協力者がわかりやすく色分けして、お年寄りのところにすぐ助けに行けるシステムにしてる。

かずや：さっきから聞いてて、ぼくは心配やったんやけど、心配から安心に変えられることないと思っていたけど、みんなの話聞いてて、なんか安心になってきたっていうか、安心にしていこうと思ってきたんよ。だから、さっきぼくはおく山のがけ崩れとか心配って言うたやろ？でも、おく山があぶないって近くにポスターとかいっぱいあったらみんなも気を付けると思うんよ。前に湯浅にいったとき電柱に小学生の書いた防災のポスターあったやん？

(C：うん)

あんなみたいにポスター作ったら心配が安心に変わると思うんよ。

まりこ：それに、安心のために「釜石の奇跡」みたいに、自分たちが一生懸命勉強するのもいいと思います。お母さんがこんな防災ずきん作ってくれたんやけど、こんなふうに自分で勉強したり自分でできることもあると思います。

けんと：そうなんよ。さっきもぼくが言うたんやけど、例えば、(黒板を指さして) こんなん(ポスター)とかこんなん(勉強)とかは自分でできるやろ？自助やと思います。そして、こんなん(避難訓練)とかは共助やと思うし、こんなん(備蓄を増やす・液状化)は公助でやってもらわなあかんから、自分たちでできることから安心を心配に変えたらいいと思います。

(C：よびかけも) (C：だんごむしのポーズもできる)

(C：そうやなあ・いいなあ)

T：そうだね、次の授業で、じぶんたちができることは何なのか考えていこうね



図6 掲示物で説明

かりんやけんとの言葉から子どもたちの変容や話し合いの中に「学びをデザインしていく子どもたち」の姿が見られた。

4. 3. みとりと支援

・個が生き、個が育つために

子ども一人一人に目を配り、みとり、評価すること、そして、その評価に基づいて、その個をどう育てたらいいかという視点をもち、具体的な姿を思い浮かべて個に応じた指導を繰り返すという姿勢が重要だと感じている。「アイデアはいっぱい出てくるんだけど、自分の考えを書いたり調べたりするのがすごく苦手」と話すB児に対しては、積極的に手を差し伸べ、B児のよさや思いをみとることで適切な支援をしていこうと心がけた。そして、B児が考えたものを資料として全体に提示し、「みんなの学習に生かされている」という自信をもてるようにした。また、個を見とることにより、B児に対しては、「家庭での多くの調べ学習を共に整理していく支援が必要」という具体的な支援の方向性が見えてきた。個が生き、個が育つための土台は、子ども理解にあると改めて感じている。

・評価を学習のバネに

一人一人が学びのプロセスや活動状況、ふり返りカードをファイリングするようにし、子ども自身が学習の計画を立てたり、自分の学びを確かめたり、観点別に自己評価を行ったりするようにした。そこで、教師の観察やペーパーテストだけでは、とらえられない子どもの内面的な成長や変容を探ることができると考えたからである。また、ワークシートやノートでの対話、学びの途中の記録、発言、やりとりの中から個に応じた支援を続け、それらを通して学習意欲を喚起できるようにすることが次へのステップになると考えた。

グループ学習の中では、雰囲気作りを大切にし、地域の代表になりきりながら話し合うことにより、追究の意欲が高まる場面も見られた。また、グループの中でも、育みたい力に照らして、個人カルテを作り、できるだけ個々の学びを見取り、記録し続けるようにした。子どもがきらりと光ったとき、それを見逃さないようにするとともに、常に支援の方向を探ることで、子どもが何を学び、どのような学び方を身に付けたのか、見方、考え方、感じ方はどう変わったのかを見届けるようにしたいと考えている。その中で、多くの人々の思いや願いに気づくことができ、和歌山の防災に対する熱い思いが感じられる発言へとつながった。

5. 成果と課題

ふるさと和歌山まちづくりプロジェクト

ぼくの家は、お母さんもお父さんも和歌山の人じゃありません。だからぼくもあまり和歌山のことを知らないし、学校が校区の学校じゃないから自分の地域のことも本当に知りません。

でも、ぼくは4月から、和歌山の勉強をして、だんだん和歌山のことが好きになりました。福岡のおばあちゃんも、福岡に行ったときに和歌山の

いろんな話をしたら、びっくりしていました。

それに、和歌山のことを知ったら福岡のことも興味が出て、いっぱい調べることができました。

調べ学習が好きだけど、特に防災の勉強をして、その気持ちが強くなりました。Oさんや5年生のみんな、消防署のMさんなど、みんなが地震から守ろうとして、ふるさと和歌山を大切にしていることを知ったからです。とくに5年生のY君は「浜口梧陵さんになる」って勉強が終わった今でも、話しているのには感動しました。ぼくにできるかなって思うけど、これから、防災の勉強をしていない人に伝えていきたいです。そして、防災だけでなく、ぼくが調べた華岡青洲や南方熊楠のすごいこととかも伝えていけるといいなと思います。

東日本大震災後、防災のあり方について多くのことが変化した。本単元以降もニュースや新聞記事で意欲的にその変化や対応について話し合っている。子どもたちは、多くの人に防災を伝えたいという思いで、地域の人とともに学びを深めた。特に家の人や地域の人意識を変えたいという「使命感」をもったことがきっかけとなり、地域を身近に感じ、まちづくりの一員としての思いを持った。

しかし、切実感を持って学習したかということ、現実性や有効性の面からの練り上げが不十分であった。意図的すぎる意見になったり、安易に一つの意見になびいてしまったりすることにもなった。また、ひとり学習の時間を十分保障した分、自分の考えを出したい思いが先行しがちなところも見られた。それだけでは、新たな発想や思考を創造し、学びをデザインする子どもたちの姿がうまれることにはあり得ない。互いの考えをしっかりと受け止め、自分の考え方と比較しながら思考を重ね、自らの考えをさらに深めて表現しあうことによって、新しい価値が生み出されると考えている。そのためにも、教師の「問い直し」や「ゆさぶり」など多くのみとりや支援を大切にしていきたい。

また、相手の考えをじっくり吟味し、疑問をもてるような子どもを育てるためにも、授業に対する楽しみ方を変える「素朴な目」を大切に伸ばしていくことが大事だと感じた。また、防災の学習を通して“続けること”の大切さを学んだ。子どもたちの防災に対する思いは強く、単元が終わった今も学習を継続している。また、出会った方々とは、これからも交流を続ける予定である。今後も、社会科の学習で学んだことを生かして、地道に、防災の輪を広げ、続け、深めていくことが地域DNAとなると考えている。

参考文献 文部科学省(2008)「小学校学習指導要領」
安野功(2006)「社会科授業力向上5つの戦略」
東洋館出版社

(2011)和歌山大学教育学部附属小学校紀要No. 35

(2012)和歌山大学教育学部附属小学校紀要No. 36